

## 第15回当事者研究全国交流集会名古屋大会 報告

～ 終わり(尾張)から始まる当事者研究～

戸田 真二

10/7(日) 愛知淑徳大学長久手キャンパスにて開催された当事者研究全国大会は、約500名の参加となりました。北海道からは浦河べてるの家をはじめ57名の参加があり、九州・沖縄からの参加もあり、愛知県からは250名。全国規模の大きなイベントとなりました。講師としてはべてるの家の向谷地生良氏×東京大学の熊谷晋一郎氏の対談があり、午後の7つの分科会においても多くの講師陣を招き入れ、それぞれが充実した内容の濃いものであったと思います。当日のシンポジウムの様子や分科会の一部はFace Book(当事者研究全国交流集会名古屋大会)に動画がアップされています。また、詳細の報告は愛実の会のホームページにも掲載されていますので関心のある方は是非ご覧ください。参加者の多くが初心者の方の分科会に集中していたことから、当事者研究への関心が大きかったことが伺えます。名古屋ではまだまだ「当事者研究」の普及はとても遅れており、中心になる組織団体もなく、有志が集まり実行委員会を立ちあげてこの1年間大会の準備をして来ました。その中で愛実の会が大会事務局を担うことになり、ここから大きな苦勞の始まりとなりました。

振り返ると会場探しから助成金の申請、予算、ちらし作成、宣伝、案内、プログラムの検討、講師選定、発送、参加申込み受付、メール電話対応、大会の準備、会計、報告書作成……。これらの事は大変ではありますが事務的な仕事と受け止めれば想定内のこととと思っていました。それが名古屋大会の準備では全く想定外の「こと」が次々と勃発したのです。名古屋大会開催の危機を多くの委員が感じたことと思います。私も心を痛めたその一人です。

人の苦勞の多くは、心的なストレスにあると思います。対人関係の中での価値観や意見の違いはもちろんです。問題はそこから生まれる自己防衛本能と排除心が活性化されると客観的な判断ができなくなり、泥沼化状態に陥るということです。名古屋大会は、終わりから始まる＝終わらないと始まらない。その終わり体験を実践したかのようにさえ思えます。さじを投げ出したい限界を私自身が感じた1年であったからです。多くの苦勞を名古屋大会の実行委員会は共有したことで初めて結束を固めました。また、全国の当事者グループが応援してくれました。やっとのことで無事終わりました！でも本当はこれからがスタートなんですね。様々な苦勞を当事者研究的にとらえていくと、それぞれの弱さを共有し合い、自分の苦勞に向き合う時、その苦勞のメカニズムを知ること、足元しか見れていなかった自分が少し前を向くことができるようになる。これが名古屋大会の当事者研究の大きな成果となりました。大会の終わりには当事者研究のネットワーク作りが提案され、名古屋から全国へと新たな発信が行われました。